

感動の場

『人・牛』（素描）

1937 年 小川原 脩 画



小川原脩の蔵書は膨大で、美術館で譲り受けたもののうち美術や哲学、旅行記など、創作に関わる関連資料に限っても 800 冊を超えます。中でも、1920 ～ 30 年代の本というのは目を引くもので、薄い紙質にシミ、そして製本のひももほどけ、背表紙が取れて、と時代を感じさせる姿になっています。

古い紀伊国屋の包装紙でカバーをされ、「Dec 2 -1936, Cahiers d' Art, Picasso」とメモされた1冊があります。今にも崩れそうな本をそっと持ち上げ、表紙を開いてみるとフランスで出版された美術雑誌「カイエ ダール」、1935 年のピカソ（1881-1973）の特集号でした。当時ピカソはすでに名声を得ていた頃で、1933 ～ 34 年には闘牛を、1935 年には牛頭人身の怪物ミノタウロスの作品を制作しはじめ、それらの最新作が掲載された雑誌を小川原は手に入れていたのです。

今回は小川原のドローイング（素描）を紹介しますが、ギョロリと見開いた牛の目玉、長く太い角、対して人物は腹と臍が見える裸体で、大きな握りこぶし、そして頭はありません。ピカソの作品を下敷きにして、無数に制作されたドローイング。そこには最先端の絵画を学び研究し、自らのモチーフを手に入れるという強い思いがほとばしっています。

文：沼田 絵美（小川原脩記念美術館 学芸員）

ふるさと探訪

452 回

炭火を使った家事道具—アイロンの歴史—

アイロンは熱と圧力で衣類のしわを伸ばしたり、折り目をつけたりする道具で、元祖といえるのは平安時代から使われていた火熨斗です。ひしゃくのような形をしたもので、金属の器の中に炭火を入れて使用します。江戸時代には炭火で直接熱して使用する鑊が使われるようになり、火熨斗ではできない細かいところのしわ伸ばしや折り目を付けられるようになりました。

明治中期にイギリスから炭火アイロンが輸入されるとすぐに国産化され、大正時代の洋装化に伴い一般の家庭にも普及していきました。形は電気アイロンとほぼ同じですが、炭火を入れるためにふたが開閉できて胴部が高くなっています。側面下部には空気を取り入れる穴があり、排気のための煙突がついています。

炭火アイロンには、炭火の火の粉で衣類や畳に焼け焦げをつけてしまったり、炭や灰がこぼれて汚してしまったりする欠点がありましたが、電気アイロンが国産化された 1915（大正 4）年以降も長く使われていました。理由として考えられるのは、火鉢やあんか、台所で日常的に炭火が使われていたため都合が良かったこと、日本の炭は品質が良いため、火の粉が飛びづらく灰が少ないことなどがあります。

最新のアイロンにも見られる船底型のアイロンの原型が 100 年以上前に作られていて、先人の完成された造形に感心させられます。



左から火熨斗、鑊、炭火アイロン

文：森脇 友行（倶知安風土館 学芸補助職員）

展覧会のお知らせ

■第 1 展示室

第 62 回「麓彩会展」

1958 年、小川原脩をはじめとする 8 人の発起人により創設された「麓彩会」。62 回目を迎える本展では、北海道における美術の現況をもうかがい知ることのできる展覧会として、これまでの形をさらに発展拡大し、地域にゆかりが深い作家、今現在この地域に根差した創作活動を展開する作家の近作 26 点をご紹介します。小川原脩が麓彩会展を「地方文化の苗床」として位置付けたとおり、地域の美術を一望のもとに観覧していただく展覧会です。
会 期：開催中～令和 3 年 2 月 7 日(日)

■第 2 展示室

小川原脩展「世界へ向かう：シュルレアリスムと美術」

東京美術学校（現・東京藝大）卒業後、シュルレアリスム（超現実主義）の芸術運動に飛び込んでいった若き画家・小川原脩。本格的にシュルレアリスム絵画に身を投じた 1937 年頃から、戦争へと傾いていく時代まで、激動の時期に描かれた作品をクローズアップします。

会 期：開催中～令和 3 年 1 月 11 日(月)

アート・イベントのお知らせ

■土曜サロン※いずれも映像ルーム（無料）で定員 10 名

世界のグレートアーティスト（6）

「ルーベンスの世紀 不朽のフランドル絵画」

日 時:12 月 5 日(土) ① 14 時、② 15 時 お話し:柴 勤（館長）

ユネスコ世界遺産（5）「仏教遺跡・建造物」

日 時:12 月 12 日(土) ① 14 時、② 15 時 お話し:柴 勤（館長）

アート・トーク「小川原脩とミノタウロス」

日 時:12 月 19 日(土) ① 14 時、② 15 時

お話し:沼田絵美（学芸員）

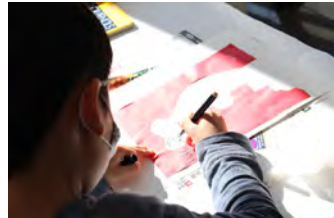
アート・トーク「小川原脩とギリシア神話」

日 時:12 月 26 日(土) ① 14 時、② 15 時 お話し:柴 勤（館長）

★「むつ先生と絵あそびしよう！」を開催しました

11 月 3 日(火)に、ワークショップ「むつ先生と絵あそびしよう！」を開催しました。

今回のテーマは「あなをほろう」。あなの形に切った紙の中に、何がいるかを考えながら描いていきます。今年は予約制で少人数での開催でしたが、窓から秋の太陽がいっぱい差し込む美術館のロビーで、不思議な「あなの中の世界」がたくさんできました。



仲間が増えた！

ひと月ほど前、喜茂別町にギャラリーがオープンしました。同町出身で、札幌在住の画家白鳥信之さんが、ご自分の生家跡に建てられたのです。黒を基調とした瀟洒な平屋建ての中に、クロス張りの小綺麗な展示スペースがあります。館長には美術評論家の柴橋伴夫さんをお願いし、企画展を積極的に開催したいとのこと。また地元にも目を向け、子どもたちの作品の展示なども考えています。このギャラリー「杣人」、少しでも早く地域に溶け込み、多くの町民に愛される施設となることを楽しみにしています。なお、火・水・木はお休みですのでご注意ください。

館 長 柴 勤